

奈良井宿かわらばん

奈良井宿観光案内所 0264(34)3160

ぬりぐし
塗櫛

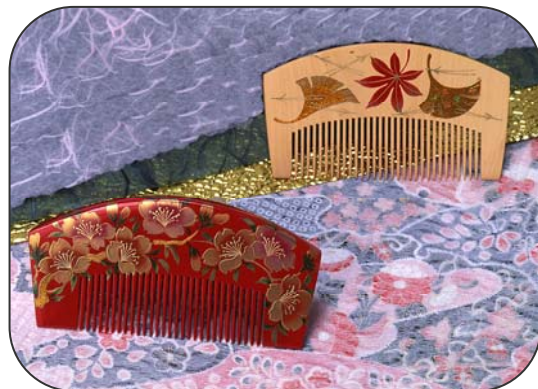


かつて隆盛を誇った宿場情緒を今に伝える「塗櫛」。

奈良井宿の木櫛の歴史は大変古く、江戸時代初期に始まり、木曾の「お六櫛」は全国的に有名です。寛政年間、中村屋^{けいきち}恵吉がこの木櫛に漆を塗り、中山道を通る旅人に大変もてはやされ、その後、吉野屋^{じへえ}洛兵衛が苦心して蒔絵^{まきえ}を付け奈良井宿の産業として成立させました。塗櫛は、江戸や京の都へ出荷され今も「江戸積ぬり櫛問屋〇〇」という支派な金着板が残っています。

大正時代にはいると、奈良井で木地、塗りを施し、東京でつまみ細工をして仕上げました。これが、島崎藤村の「初恋」で知られる「花櫛」^{はなぐし}ですが、大正末期にはすっかり姿を消してしまいました。

その後、昭和42年ころから塗櫛を復活させ、現在でもつくり続けられています。



江戸時代初期から今まで350年余りも続いた、木曾のお六櫛は、その永きに渡る歴史において数々の工夫技法が凝らされ、今日の美しい姿へ変化してきました。

「お六櫛 つくる夜なべや 月もよく」 — 山口青邨^{せいそん} —

楢川歴史民俗資料館横に建つ句碑。月夜の晩に櫛つくりの夜業を見て詠んだという句が刻まれています。

山口青邨(やまぐち せいそん、1892年5月10日～1988年12月15日)は、日本の俳人・鉾山学者。本名は山口吉朗(きちろう)。

参考文献: 楢川ガイドブック・アルファベットでみる楢川より

ご存知ですか。

ろく ぐし
お 六 櫛

本曾のお六櫛は、有名な名産品となっているが、“お六櫛”には、こんな伝承がある。江戸時代にお六という娘が妻籠宿に住んでいたが、不幸にもお六は、生まれつきの頭痛持ちで、日夜御嶽神社に百日の願がんをかけていた。その満願の百日目の夜、御嶽大権現がお六の夢枕に立ち、「地元産のミネバリの木で、櫛を作って髪をすくと、たちどころに頭痛がいえるだろう」というお告げがあった。

お六は、よろこび、早速ミネバリの木で木櫛を作って用いたところ、不思議にも難病の頭の病気が全快した。そこでお六は、自分と同じ病気で悩む女性のために役立てたいと、願いをこめて一心に御嶽大権現への感謝を込めて木櫛を作った。

そのことが妻籠宿の宿場中に口伝えて、広まり、霊駿あらたかな木櫛、頭痛の治る木櫛、この櫛で髪をすくと頭が良くなると評判になり、中山道を通行する旅人たちが女房や女性のためのみやげ物として、飛ぶように売れ、妻籠宿の名産品となり、その櫛をいつの間にか、「お六櫛」と呼ぶようになった。

このミネバリの木は、カバ科に属す落葉喬木で、別名オノオレ・オノオレカンバとかアズサという高冷地特産樹木で、五月頃黄褐色の花が咲く。名のごとく斧が折れるほど堅くて、ねばりがあり、木の目が美しいのが特徴である。

参考文献:「かわら版歴史の道中山道」より